

いわゆる「田園型事故」の防止

なぜ見通しが良くても交通事故が起きるのか

交通事故が起きるのは、実に様々な原因・理由がありますが、そのなかで、「田園地帯等の見通しの良い交差点における、出会い頭の交通事故」が思いのほか、多発しています。

なぜ、見通しの良い交差点で交通事故が多発するのでしょうか？

これから、このような、田園地帯の見通しの良い交差点で起きる交通事故、いわゆる「田園型事故」が発生するメカニズムと、事故防止のポイントを見ていくことにしましょう。



【このような場所で発生しています。】

田園型事故の原因は？

交通事故が起きる原因ははととも多く、一つに絞り込むことはできません。

しかし、あえて「田園型事故」の主な原因を挙げるとするならば、次の3点であると言えます。

以下、それぞれについて解説し、対策を考えていきましょう。



「田園型事故」の主な原因

- 1 コリジョンコース現象
- 2 車両の死角
- 3 錯覚による心理的落とし穴



コリジョンコース現象

コリジョンとは「衝突」という意味です。

ここでは、「車両がそのまま進めば衝突する進路」という意味で進めます。

実は人間の視覚が影響している

「田園型事故」の当事者は、「お互いの車両を見ることができたにもかかわらず、衝突直前まで発見できなかった。」と言います。

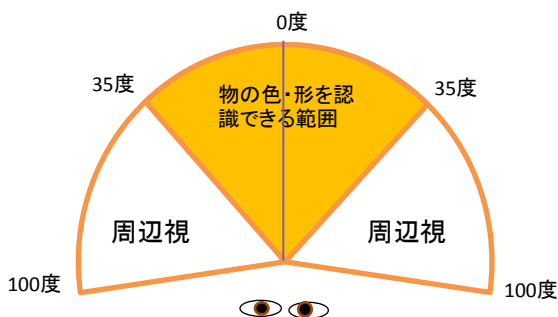
実は、これには、人間の視覚（見ること）の特性が深く関わっているのです。

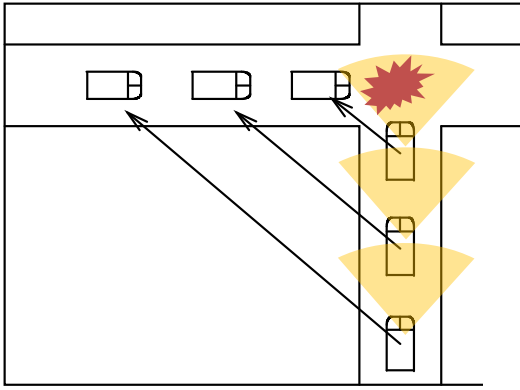
右の図は、人の視界を表しています。概ね正面を中心にして左右約100度の範囲を見られると言われていています。

しかし、この中で、物の形や色まではっきり識別できるのは左右約35度程度のごく狭い範囲に限られているのです。

それ以外の範囲を「周辺視」又は「周辺視野」と言います。（以下「周辺視」といいます。）

最近の研究によると、「周辺視」の中では、「動かないものは認識しにくい」という特性があることがわかりました。





左の図は交差点に同じ速度で進行してくる2台の車を意味しています。

同じ速度ですから見える角度が変わりません。ですから周辺視の中では風景に溶け込み、あたかも「動いていない」ように見えてしまいます。

「動かない物は認識しにくい」という周辺視の特性により、直前までお互いを発見できず、衝突してしまうのです。

事故防止のポイント



見通しの良い道路では、意識して顔を左右に向け、見落としがちな「周辺視」の範囲に注意を向けましょう。

車両の死角

ピラーの陰に潜む危険

自動車にはルーフ(天板)を支えるピラー(柱)があります。

通常は自車が移動するとそれに応じて死角が移動するのであまり気にする方はいないのかもしれませんが。

しかし、田園型事故については、このピラーの死角も原因の一つと考えられます。

上の図で考えると、同じ速度で交差点に進行する場合、相手の車がピラーの死角の中に入り込んでしまうことがあるのです。

ピラーとはこの部分を言います



事故防止のポイント

少し頭を前後に動かして、ピラーの死角に入り込んでいる車両を発見しましょう。



錯覚による心理的落とし穴

自分の方が優先だと思いこむ

田園型事故の主な原因の三つ目は、交差道路の幅が狭く見えるため、自分が通っている道路が優先だと思いこんでしまう、という心理的な落とし穴です。

自分が優先だと思いこんでしまうので、当然、「相手は止まってくれるだろう」と考えてしまいますが、ちょっと待ってください。

今自分がそう感じるようならば、同じような道路を通行している相手も同じように優先意識を感じているはずですよ。

事故防止のポイント

十分に減速して、路面標示や周囲の状況、相手車両の動きをよく確認しましょう。ゆずり合いの気持ちで事故防止！

